

信 毎 歌 壇

米川 千嘉子 選

コメ棚にコメ無く困っていたわれに見知らぬ婦人が譲り下さる (長野市) せきたつお
「あ」とその濁るも どうしてと言に問ふ何百回もの悔いの反響 (千曲市) 中村 美樹
これ以上話せば涙とゆきずりの人を見送る菜畑暮れて (中野市) 大坂くみ子
コリヤンを野菜と煮込み箱膳を並べて食べた女と子供 (小布施町) 市村志津枝
しつとりと汗ばむ子なり洋間に描きをる石膏のナボレオン (小諸市) 加藤 陽介
二〇二個編みしモチーフの繋ぎ方わからず私はいつでもかうだ (松本市) 堀内 悠子
同じこと百回千回聞いてなおスマホ分かれぬわれに降参 (岡谷市) 吉池富貴男
老体に歳の実感追いつきて九十歳の坂に喘ぎぬ (長野市) 丸山 祐司
流れくる千曲川と犀川の合流点中洲に二羽の白鷺の見ゆ (須坂市) 高野 等
シーズン前の健康診断受けている鶴の首さすりつづける鶴匠 (長野市) 原田りえ子
佳作
奥信濃清水煮缶を箱購ひし(鯖竹汁)の季節となりぬ (飯山市) 市村紀久子
妻病みて古希の学びの数多あり初めて作る竹の子ご飯 (飯田市) 萩原 英文

選評

第一首、店頭で困っていた作者に、まだ買い置きがあるからと声をかけてくれた人がいた。読者もほっとする。第二首、苦い記憶がよみがえって声が漏れることがある。悔いの感情はなかなかやっかいだ。第三首、たまたま行き合わせた人に身の上を話すようなことがあったか。余韻が深い。第四首、戦中、それも末期の頃だろうか。昔ながらの箱膳だが、載っているのは乏しい一晩だけなのだろう。

小池 光 選

からつぽの犬の餌皿に落ちにけり大山桜のはなひらひとつ (長野市) 原田 浩生
父母の田仕事するを飽かず見たれんげ畑に埋もれてむかし (松本市) 溝上ひろみ
春の夜一人「カノン」を耳にして遠く来た道振り返りけり (松川村) 岡 豊村
新調のお勧め品のスニーカー足に好かれて野に出たがりぬ (箕輪町) 向山 政俊
菩提寺の天井裏にもハクレシシ住みぬと聞きぬ法要の席に (飯山市) 小野沢竹次
女子アナの声のにわかに明るみて大谷翔平のホーランを告ぐ (長野市) 原田りえ子
林檎梨桃の花咲く北信濃力漲る春來たりけり (飯綱町) 坂井 寿男
歯科医院出づれば五岳の山山よ我を見ている夕焼西 (中野市) 増田きみ江
カフェエテを一口飲んで近況を一つ話して午後が過ぎゆく (長野市) 宮沢 信博
定年となりし息子と草引きつ企業戦士の思ひ出はなし (長野市) 丸山 祐司
佳作
高峰に霧立つ朝はすがすがし四十雀鳴く森に憩えば (長野市) 室川 志郎
主なく荒れたる庭に不似合いの真紅のばらがつまみに咲く (千曲市) 宮川 恵子

選評

第一首、犬のからつぽの餌皿にさくらのはなびらが落ちる。ただそれだけの些事なのだが、それで十分歌になる。作者は最近腕を上げてきた。第二首、速いむかしの思い出。父と母が田んぼで一生懸命働いている。れんげの花が咲いている。平和そのものである。なつかしい。第三首、これもきれいな歌。ラジオから流れる音楽だろうか。きつと思いがあつた。いろいろのことがあつた思い出よ。

小島 なお 選

信大の学舎に並ぶ自転車に各高校の名のステッカー (松本市) 近藤ひろ子
1 夕の絵の如く居眠る人を見て一足先に電車を降りる (麻績村) 小山みよ子
パレットをひろげたように花開き街行く園児信男わたる (安曇野市) 加藤 文人
構想を練りつつ選ぶ野菜苗園芸店は意外と静か (長野市) 西本 真琴
薫風に十二人なるバイク隊青々とゆく兵役なくば (須坂市) 堀内佐代子
店員の名札はなべて愛称に仮面をかぶり働きを (安曇野市) 細川 恒
か 飢餓故に並ぶ行列吾は現在平和なる故並ぶパビリオン (小布施町) 市村 憲彦
をさな児が「ボチおしゆわり」と命ずるも訓練受けぬボチは飛び跳ぬ (長野市) 山岸しげお
榛の木に林に籠もる鳥の声初夏のやぶは丸ごと果箱 (長野市) 近藤 光子
登校の列の後尾の六年生旧街道に大声ひびく (長野市) 丸山 祐司
佳作
餌食わす一晩中鳴き声囁れる売られた我が子呼ぶ山羊の母 (千葉県船橋市) 清水 渡
背筋伸び富士山のごとく堂々たり山道登るその大鹿は (伊那市) 赤羽 正彦

選評

第一首、新入生たちを迎えた信州大学。駐輪場の自転車には、この間まで高校生だった名残が貼りついたらまだ。第二首、ぐにやりと溶けるように眠る車内の人。あわただしい春の疲れがシュールな光景に。第三首、花も園児たちもとりの賑やかさで開花している。ぱっとあざやかな比喩。第四首、種をまく時期や場所、肥料の相性など。畑仕事は力仕事でありながら、繊細な構想が必要でもあるのだ。